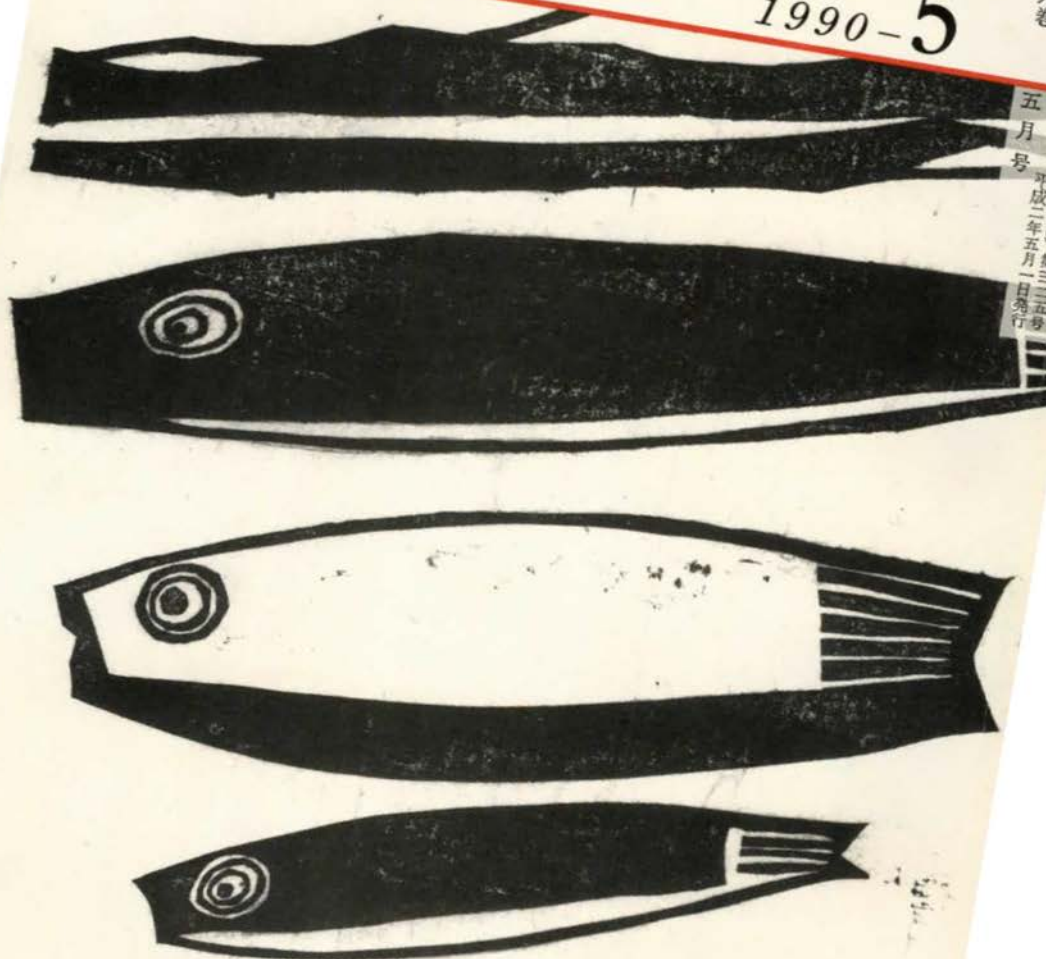


淨土

1990-5

五月
号
平成二年五月一日発行
三



5 五月04日 5



五月の秀句

噴水の玉とびちがふ五月かな

中村汀女

夏めくや椎のかづきし雲のいろ

高橋潤

薫風や神への誓い美しき

榎本摂子

五月号



釈尊これを一々に説き給える三部
経、豈一言虚しからんや。

——『念仏大意』

目次

——連載法話(Ⅰ)——

名体不離の念仏……………八 木 季 生……(2)

◇特別寄稿◇

源智上人と角張入道覚書(下)

……………石 畠 俊 徳……(9)
——百万遍余話——

<いのちを考える②>

管だらけのいのち……………佐 藤 雅 彦……(21)
——植物人間を看取る——

季語やぶにらみ (1)

化 偷 草

……………木 下 隆 一 ……(28)

◇◇長篇連載◇◇

伝弘の生涯(17)

……………松 浦 行 真……(35)
——大僧正岩井智海伝——

表紙絵 小林治郎画

(I) (話) (法)

名 体 不 離 の 念 仏



八や 木ぎ 季き 生しょう

(大正大学講師)

古来「名は体を表わす」という言葉があるが、名はその名の付けられたものの実体を表わし、人の名は、その人の人柄を表わすものである。

この言葉の本来の意味は、名と体とは一体のものであって、切り離すことのできぬものということである。

例えば、小さい子供が「お母さん！」と呼んだ時、その声、ヴォイスの中には、子供の母親に対する思いと願いのすべてがこめられているのであって、「お母さん」と呼んだ音、サウンドのみがあるのではない。

母の名を呼ぶ幼な子の声の中には、その子供の母親に対する切なる願いがあり、声を口にしてゐる時には、反射的に脳の中には母親のイメージが浮かんでゐる筈である。

我が子に名を呼ばれた母親は、その声のする方に注意を向け、声の様子如何によつては、顔色を変えてとんでいくこともあり得る。我が子の声のする処、また我が子が存在するのである。

この名と体とは一つであるということを、仏教では名体不離と呼んでゐるのはご存じの通りのことであるが、この名体不離の語は「名は体を表わす」という程度の世俗的なことではなくて、名即体である宗教の極致、とくに念仏の世界に於いてはその極意をあらわす重要なことであつて、念仏が声の宗教と呼ばれる所以はここにある。

江戸時代末期にあらわれた念仏の行者、徳本行者は、念仏申すその「声」を大変大事にしたが、まづ念仏の始まりには発声からはじめるのである。

先ず大衆に向つて「なー」と言わせる。大衆が「なー」と称えると、こんどは「むー」と言わせる。そこで大衆が「むー」という。

こうして南無阿弥陀仏のすべてを言わせると、こんどは「なむー」と言わせ、同様にして「あみー」、「だぶー」と二字づつを称えさせる。

これが済むと、そこで初めて「なむ、あみ、だぶ」と連称して念仏を始める。こうする

訳を徳本行者は勸誠の中でこう言っている。

「もし六字を欠けば、即ち片輪念仏なれば、片輪念仏にては極楽往生は難きぞかし。六字をなまりがちに称うるは、名号とはいわれぬなり。往生もならぬなり。娑婆の宝すら賈にせの金銀は通用せぬを、まして無為泥洹ないげんの国へ往生せんに、なまりて似せたるは通らぬぞかし。六字が一字欠けても通らぬと知るべし……」

と、六字分明に念仏を称えることの重要性を述べている。また、

「円光大師の曰く、大乘の意は、躰の外に名なく、名の外に躰なし。万善の妙躰は即ち六字の名号なり。もろこしの光明大師は、仏名一こえ唱えたまえば、弥陀仏一躰御口より出たまいぬ。仏名の声にしたがいて数万の仏躰現じ給う……」

「師、名体不離の秘訣を悟りてより、常に名号を書して諸人に与う。名と躰と一つなるが故に、六字分明に唱うべし。六字のうち一字を欠きたらんには、即ち仏躰を欠くなり」と、常に説法場で強調したことを、弟子が聞書きの中でのべている。

徳本行者は、四才の時に遊び友達の急死に出会って無常を感じて念仏を申し始めてから、六十一才で亡くなる迄の五十数年の一生を、但信口称、無師独悟で貫いた大念仏者であるが、念仏の極意なるものを強いて探してみると、名体不離に帰着すると思われる。

徳本行者の道詠には、名体不離に関するものが数多くあるが、「言葉の末」という道詠

= 德本行者名体不離像 =



集のなかに、

唱えれば 名体不離の阿弥陀仏 具足十念 即得往生

唱うれば 姿が声にあらわれて 阿弥陀ともうす ほとけなりけり

恋しくて 阿弥陀仏々 唱うれば 弥陀も此身に すれつもたれつ

また「德本上人詠歌諺註」の中に、

「恋しくば よんでいざむせ 阿弥陀仏 ほど遠けれど 口へくるなり

此歌の心は、阿弥陀仏を恋しと思うならば、常に御名を呼ぶべし。呼ぶとは、念仏を申すことなり。さすれば十万億程遠けれども、念仏申す者の口には、仏が来たりたまうとなり。これを善導大師の応声即現の御釈の意を詠ずるなり。弥陀の仏躰と、御名の南無阿弥陀仏とは、名体不離にして同じものなれば、心眼開きて見る時、南無阿弥陀仏という声は、すぐに阿弥陀如来とおがまれたまうなり」

と、注釈している。珍しいのは名体不離の仏像である。このことに関しては、佛敎大学の藤堂恭俊先生が詳細なご研究を徳本行者全集の研究篇にのせられている。

また光明主義を提唱された山崎辨榮上人は、礼拝儀という独自の勤行式を定められたが、その朝の礼拝の最初の部分に、「至心に帰命す」と題する礼拝文があつて、冒頭の文に「法身、報身、応身の、聖き名に帰命し奉る……」と先ず帰命する対象を、聖なる名、つまり六字の名号にしている点はまことに注目すべきことである。

これも名体不離なるが故に、名を唱える中に阿弥陀仏の体に直参することができからに外ならない。

先にも述べた如く、われわれの口にする声は、その名の示す体が印象として内存するから、名の存在するところ印象がついてまわる。

たとえば、「梅干」という言葉を口にしたとする。なにか口の中にジュとした酸っぱいものが感じられるであらう。

これは言うまでもなく、梅干という言葉に対する過去の印象が記憶されていて、その記憶が梅干という言葉によって思い出され、条件反射的に唾液を分泌させたものである。

南無阿弥陀仏の名号も、名号そのものに徳が備わっていて、名号を口で声にして称えるとき、梅干という言葉によって唾液が条件反射的に分泌されたと同じように、名号の徳が称えた人のからだに漲ってくるのである。

法然上人は「選択集」の中で、名号は万徳の帰する所なりとして、「阿弥陀仏の四智、三身、十力、四無畏等の一切の内証の功德、相好、光明、説法、利生等の一切の外用の功德が名号の中に摂在する」と述べている。

先の梅干と唾液の関係は、梅干を食べた経験があることを必要条件とするが、名号の徳は、阿弥陀仏に対する過去の経験の如何に関係が無い。

生まれてからこのかた、阿弥陀さまとのご縁が全く無かった人でも、仏名を称する縁が与えられ、自ら念仏を申しさえすれば、自然と名号の徳が表われてくるのである。

法然上人の「勅伝」二十一の常に仰せの言葉に、

「或る人、上人の申させ給ふ御念仏は、念々ごとに仏の御心にかなひ候ふらん。など申

しけるを、いかなればと、上人かへしとはれければ、智者にておはしませば、名号の功德をも、くはしくしろしめし、本願の様をも、あきらかに御心得あるゆえにと、申しけるとき、汝本願を信ずる事、まだしかりけり。弥陀如来の本願の名号は、木こり、草かり、菜つみ、水くむたぐひごときのものの、内外ともにかけて、一文不通なるが、となふれば必ずうまると信じて、真実にねがひて、常に念仏申すを、最上の機とす」といのお言葉、或いは同じ「勅伝」二十五の、

「弥陀の昔誓ひたまひし本願は、あまねく一切衆生のためなれば、有知・無知、有才・無才、善人・悪人、持戒・破戒、たとき・卑しき、男・女も隔てず、若しは仏の在世の衆生、若しは仏の滅後の衆生、若しは釈迦の末法万年の後、三宝皆うせて後の衆生までも、ただ念仏ばかりこそ、現当の祈りになり候ふめれ……」

というご法語からも、名号のあらわす功德は、過去の行業と関係の無いことが知れる。そこで徳本行者は道詠に、

六字丸　ただ信心の冷や水で　だまって飲めば　諸病平癒

と詠っている。そして、とかく人は薬の効能ばかり詮議立てて薬を飲まないか、飲んですぐ止めてしまいか、散発的に飲んだりしているが、名医が調剤した万徳所帰の良薬も、不断に飲み、飲み続けることが何より大事なことだとしている。

《特別寄稿》

源智上人と角張入道覚書
(下)

— 百万遍余話 —



石^{いし} 畠^{はた} 俊^{しゅん} 徳^{とく}

(大津市浄光寺住職)

(三) 成阿入道の生涯について

成阿は信濃国松本の満政を祖父に、その七男の七郎政氏を父として、現在の上田市の近傍の角張の庄（或は角張むら）に次男荒次郎某として、仁平二年（西暦一一五二）に生まれて

いる。荒次郎某には七郎太郎某という長兄がいた。荒次郎が五才の時に、父七郎政氏を亡くしている。荒次郎が十二才のとき、後の親鸞聖人が生れている。

荒次郎の祖父満政は中部信濃の押領使として、松本（当時国府があった）に居城し、その子七郎政氏は上田周辺の「角張の庄」に住み、北信濃の押領使をしていた。

荒次郎が壮年に達した頃、木曾に於て義仲が源氏の旗挙げをした。この源氏一門の比較的近親関係にある荒次郎兄弟は、木曾義仲勢に加わり信濃の各地を転戦した。荒次郎は、その名の示す如く、大変な力持ちで勇敢な武士であった（源平合戦の始終は中略）。

〔参考〕角張入道成阿の木像が浄運寺様に新彫の節、護身用の鉄扇を持つ姿とされたが、瀬田唐橋の中島に建つ俵藤太秀郷像も鉄扇を持って居られるのに気づきました。義仲、兼平の最後について申添えます。

寿永三年（一一八四）一月二十日、頼朝の命をうけた範頼・義経の大軍が西上するや、勢多・宇治・京の四条河原に迎え撃ったが、何れも敗れ、乳母子（乳兄弟）の今井兼平の待つ近江国栗津に於て討死することとなる。

上洛してから半年、征夷大將軍となり、旭將軍と称してから僅か五日目のあえない最後であり、正に風雲児の名にふさわしい。

愛する巴を戦場から去らせた後、名誉ある自刃の道を選ばず、兼平を案ずる余り、雑兵

石田輩に名をなさしめた彼の死に様は、平家物語巻九「木曾殿最後」に感動的に形象されていて、人々の心に永く生き続けている、と。

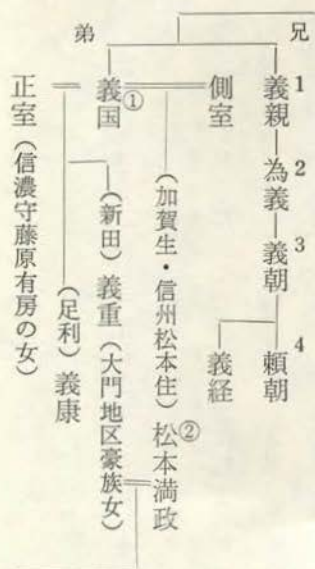
今日も尚、粟津ヶ原の古戦場の趾当りには夜もふくる頃、ザワザワといううめきの声が聞かれるとの事に、先年有志によって源平両軍陣者歿慰霊供養塔が建立され地元の人々によって厚く弔慰されている。建塔開眼式には、お招きをうけ親しく参拝いたしました。

〔附一〕◎角張氏略系図（関係分のみ）

（清和源氏、満仲・義家・義国流）

清和天皇—貞純親王—源経基—満仲—頼信—頼義

「八幡太郎義家」



郷帰 国四 代時 京在

貞応 元	建暦 元	建永 二	元久 二	文治 二	同年 七月	元暦 元	寿永 二	養和 元	同 四
---------	---------	---------	---------	---------	----------	---------	---------	---------	--------

木曾冠者義仲拳兵

頼朝（東国）、義仲（北国）、平家（西国）三勢力対峙

木曾勢北陸より花洛に乱入

後白河密勅、鎌倉勢上洛

義仲、栗津原にて討死

勢多の初陣で角張従兄弟討死。荒次郎出家（三十三才）

大原談義の席に侍す

二尊院起請文に署名す

恩師の四国流謫中守護す

恩師赦免帰京。成阿帰郷。信州に浄教宣布三ヶ寺建立

成阿示寂（七十一才）

〔附三〕◎角取系角張氏に残る成阿の遺物

成阿は当時、京都において、摂政関白太政大臣九条藤原兼寛はじめ堀川の右大臣など、当時の貴族達との交遊があったものと思われる。

一、漆器

①花台、古くから伝っているもので勾玉、三年草、唐子等の文様を描いた漆絵を有し、平安末期のものと考えられる（高さ40cm）。



——法然上人流刑出発の日
力者の棟梁の角張成阿房
（『法然上人絵伝』より）——



——手をかざして力者達を励ます
成阿房の図（『法然上人絵伝』より）——

②筒、朱漆の金泥唐草文を有し、中央に青貝の螺鈿で加飾したもので、高麗時代に渡来したものと思われる（径18cm）。

二、金銀器その他

①銀台に鍍金を施し、浮出文で桐及び牡丹文を表した盃で、足利氏との関係を物語るものと思われる（径9cm）。

②玉器、白玉を三ヶ月形に加工し、一面が山形に円型に盛り上ったもので、古く中国より渡来のものと思われる（径9cm）。

三、書画

①南北朝時代、伏見宮家第二代治仁王女智観女王（仁和寺十地院へ入室）親筆。和歌断簡（仁和寺在住）、成阿より後代のものであるが、足利氏との関係を示す。

②画 鎌倉時代から室町初期と思われる「大和絵観桜屏風断片」「銀雲が黒化し、白色に胡粉（貝殻）を用いるより、鎌倉以降と思われ、画風及び風俗より中世初期のものと考えられる」。

③書 平安時代の書一通。沢（藤原）安親（印章付）。

四、陶・磁器

①新羅焼風須恵器大平鉢（径33cm）（中世初期）。

② 北宋青磁水注及び壺各一ヶ（高さ15 cm）。

③ 南宋浮牡丹文八角鉢（青磁）（径15 cm）。

④ 北宋彫花不遊環 青磁花瓶（高34 cm）。

⑤ 元代 五彩及青花磁碗（若干）等。

〔附記〕成阿の在京時代の遺品と思はれる。

右の品々を、最近新潟県では重文指定の手続きを進めていられるとのこと。

その後、荒次郎及び七郎太郎の角張一族は現在の新潟県中魚沼郡の今井村落の今井の山城で、城主として国境の守りについていたものと思われる。

やがて寿永二年（一一八〇）木曾勢は北陸の越中・加賀・越前を通り平家の大軍を破って花洛に乱入した。

然し半年もしない中に、今度は後白河法皇の密命により、鎌倉の頼朝勢は範頼・義経を大將軍として、宇治川・勢多に攻め込んで来た。木曾勢は宇治川と勢多の両陣で防いだが衆寡敵せず壊滅した。

その際、角張一族の七郎太郎と荒次郎の子息達は恐らく元服して間もない若武者の初陣であつたろうが、父荒次郎らが、後白河法皇を守護するため白河殿に向いて勢多に居合

はさぬ中に、二児は儚くも討死した。

後にこの報をうけ、世の無常を感じて、遂に荒次郎は法然上人の御弟子となり、法号を角張入道成阿弥陀仏と号した。

入門後は、諸伝に伝えるように、師の法然上人に誠心誠意お尽し申し上げ、特に四国御流滴の砌りには、力者の棟梁として采配し、赦免、御帰洛まで、常随、警護の任を全うし、御帰洛の上は、先に弟子の不乱房寿長に内命して郷里信濃に先に歸し、念仏道場を開基するよう準備をさせてあったので、直ちに、師法然上人の膝下を離れ、後を勢観房源智に託して、帰郷、念仏を信州の地に弘通するとの、次の大任をおびて離京した。

離京に先立って、名残りをおしまれた、源智上人は、法然上人御正筆の名号を成阿に譲与されたのであろう。

尚法然上人よりは御所持の念珠を賜うた。前記「一枚起請文」の相承とあるのは、法然上人御示寂の後、一月二十九日付で、遠隔に住む高弟達に、源智上人自ら浄写して贈られた。その一本を成阿も承けられたのであろう。源智・成阿両上人の親交の程が伺われる。

④ 成阿建立の北信の三ヶ寺

承元四年（一二二一）、法然上人は御勅免により京洛への帰還が許されたので、随行して

いた成阿は予てより（建永二年）四国へお供して離京する前から、代理人（不乱房寿長）を郷里の信濃に送り、布教と寺院建立の準備に当らせていた。その準備も漸く整い、機も熟したと考えて、帰洛と同時に、恩師の膝下を辞し帰郷、法然上人の頭文字の「法」の字を頂いて、最初の寺を法運寺と号し、出生地の角張庄に近い更埴市に建立した。

次の浄運寺は、二年程後に、これもかねてより準備されていたので、建保三年（一二二四）に浄阿（成阿）自身の頭文字をとった。浄運寺を須坂市井上町に建立した。ここには成阿の信濃での先妻（正室）との間に生れた次男（長男戦死）の屋敷が井上土栗にあったと考えられる。

最後の太興寺は、法然上人の「念仏の興行は愚老一期の勸化」とのお詞をうけ、かねて郷里信濃に浄土念仏の教えの宣布興隆を悲願とし、師命と承知している成阿として、太興寺の寺号を称したものと思われる。

この頃には成阿も六十才も半ばを過ぎ、勸進にも広範囲に、苦勞も多かったと思われる。承久年間（一二三〇）に浅野島に建立されたが寺は千曲川沿いの低地にあったために、度々水害にみまわれ、一時廃寺となっていたのを元和元年現在の小布施町にて再建され、寺名は大光寺と改められた。

尚成阿晩年の住居は長沼の津野村附近に在り、ここに京都で結婚した後妻（京都妻）と生

活していたのではなからうか。その子孫がその後越後の天林寺村に移り、それから更に角取村に移ったのが、現在の角取系であろう。

長沼の津野村に成阿の屋敷があったと思われるのは、長沼の正覚寺に伝わる皀月太子についての伝説からである。この伝説より推定すると、現在の井上土栗には成阿の先妻（信濃妻）の住居があり、長沼には後妻（京都妻）の住居があったと考えられる。

信濃国長沼津野村に成阿の在京中の遺留品を引き継いでいた、所謂長沼の角取系角張氏は戦国末期に多分川中島での甲越合戦の前後に戦火を避けて、越後の天林寺村に移った。

しかし、上述のように角取系角張氏は京都志向型で、初代より三代までの墓を京都の大谷に設け、成阿に関する系図、伝承などが、明確に残されており、成阿の遺品（別記）と思われる平安時代の書、画、歌の墨蹟、或は陶漆器類が多数残されている。尚これらの中に足利氏との関係を示す北朝の皇族の断簡等もあることが判った。

終りに、兄七郎太郎は木曾勢に組し戦ったが、義仲・兼平の陣歿後は、共に戦った加賀の豪族富樫氏（藤原利仁流―家紋上り藤―後に加賀守護職となる）を頼って一時身をゆだねたものと思われる。と。

この覚書を、『浄土』誌にもたびたび寄稿されていた

今は亡き高橋良和学兄の霊前に捧ぐ

未得会念阿合掌

（了）

管だらけのいのち

— 植物人間を看取る —

佐^さ
藤^{とう}
雅^{まさ}
彦^{ひこ}

からだじゅうに、管は差し込まれ、取り付けられ、その「管だらけ」のおかげで、生命は維持されている。そんな状態に私たちがなったとしたら、それでも

「生きたい」と願うだろうか。現時点での科学では、回復の見込みはありえないという。それでも奇蹟的に、なおることを信じようとするだろうか。これらの問



いかけは、健康でいるときには、考えもつかないことであると同時に、反って、年寄りを家族にもつ者には、ふれたくない、そんなことを考えるのすら不謹慎と目を伏せてしまう空気が、私の家族にもあったような気がする。

集中治療室へ昇る階段は、三人並ぶとこっばいほどの幅で、くすんだクリーム色の壁は、一段昇るごとにコンクリートの冷んやりとした息づかいが感じられる。

重たい扉を押し開けると、長方形の狭い空間が、もう一つの扉との間にある。

右手の壁際には、ハンガーラックがあり、十数着の割烹着によく似た白衣、無菌服が、ひとつひとつハンガーにかかっている。

大きなと思われるそれを身につけると、は、次紙でできたマスクだ。使用後、ほうりこまれたユニット式のマスクのゴミ箱には、妙な気がした。ホコリとりのマットの上で靴をスリッパにはき替る。そこで私がした支度は、日常生活からは遠くかけはなれた、テレビか映画でみた宇宙人の服装のようで、なんだか、束の間の滑稽さをおぼえる。

「集中治療室」と書かれた緑色のランプの下は、自動ドアになっている。ランプのほぼ斜め下に来たとき、扉は、左と右に、分かれて開いた。

従姉は、「こっちょ」と私に手まねきして、奥へ進んでゆく。扉のすぐ前には、つい立てふうにポートが置かれ医療器具

の入っているらしい箱が種々置いてある。すでに二時間ほどが経ち、病院のオキシドールの匂いには慣れていたはずが、この部屋は、それとはまた違った匂いがある。

並んだベッドが眼に入ったとき、私は、思わず、ツバをのみこんだ。ベッドの上の病人たちは、凡そ、裸身でいるのだ。上半身ベッドを立てて裸でいる人、白い布が腰のあたりにしか、かかっていないで寝ている人。一見、それは、男なのか女なのか、よほど眼を凝らしてみなければ、分別がつかない。何故なら顔や、からだの特長的なところには、管やチューブ、そして機械がとりつけられているからだ。無論、集中治療室とは、人間を

「管だらけ」にして命をつなぎとめるところとは、既に、知識としては解っていた。けれど、それを眼前につきつけられると、なんだか、異次元に自分はずむ者のように思えてくる。

従姉は、立ち止まった。おばさんだ。しかし、昨日、「行ってきます」と云って言葉を交わしたおばさんとは、まるで別人のようだ。おばさんは裸だ。明治の末に生まれたおばさんは、肌をみせることなど、ほとんどなく、いっつも和服で、キチンとしていた。そのおばさんが、乳房をも露わにし、ヘソから下に、白いカバーのかかった毛布をのつけているだけの姿でいる。おばさんに、髪の毛がない。顔からアゴまで、包帯で覆われている、

そのすき間、耳のそば、襟足に毛がない。後で聞かされたことだが、頭部の手術をするために、剃髪されたそうだ。鼻の穴には二本の管が入っている。口もとには、酸素マスクのような透明のビニールのチューブ。頭、胸、腕、首、露出した素肌のいたるところに、吸ばんや、ベルトでとめられた電線のような赤や青の管が、ベッドの枕元にある大きな機械へと継ぎ接がられている。「おばさん！」声をかけても、無論、反応はない。枕元のネーム・プレート「小池千代」がなかったら、見渡しただけでも十数基はあるベッドの上の病人たちのなかに、おばさんを探し出せはしないかもしれない。

三十代そこそこではないだろうか、若

い医局員が、私たちの側に寄ってきた。私たちは、「お世話になります」と軽い会釈をした。彼の視線は、私たちから、おばさんの枕元の機械の方へ移つされた。私たちの目の高さのあたりに、映像をうつしだすモニターが数台並んでいる。緩やかな山と谷を描き出す電波、殆んど平端なライン、ピッ、ピッと二、三秒ごとにボールを投げられたように飛んでゆく、光の線、なんのこともか、私たちには、解るはずもない。ただ、モニターに描かれる電波のどれをみても、躍動的に感じられる線はないことから、おばさんをささえている生命の力が、弱まっているんだらうなど、勝手な想像をするだけだ。若い医局員は、「危険な状態です」

と説明をするとき、おばさん自身をみて語りはしない。もはや、医局員にとっての「おばさん」という患者の生命は、彼女のからだにあるのではなく、映像としてうつし出される電波に見出されるのみなのだろう。彼の、「CTスキャンの発達で、運びこまれてきたとき、脳硬腫をおこしている場所がすぐ発見できましたから、即刻、頭蓋骨を切断して、除去し脳の圧迫を少なくするようできましたので、一命をとりとめることができました。おそらく、二、三年前では、助からなかったろうと思います」という言葉に、医学に携わる者として、自分たちの所有する最新の技術で一人の患者の生命を救ったという自信が、感じられる。ま

た、CTスキャン（断層撮影）の急激な普及で、二、三年前までなら、すぐに亡くなっていたらう病状の患者の生命を、延ばすことのできる医学を、何の疑いもなく、讀んでいる一人の信仰者の言葉とも聞こえた。

「脳死の状態ではないんですね」

「はい。今の状況では、意識はありませんが、かすかながら、脳波は認められます。一様、自発呼吸といえるでしょうが、レスピレータ（人工呼吸器）をはずすと、呼吸は、とまる危険性が多分にあります。脳死には、近い状態といえますが、まだ脳死ではありません」

私の質問に、若き医局員は、平易に答

えてくれた。

「意識の回復する見込みは、どうなんですか」

私は、答えを恐れながら尋ねた。

「まづ、無いといってよいでしょう。三日もつか、十日もつか、あとは、御本人の生命力の範囲の問題としか、私たちにも、お答えすることができません」

医局員は、自分の言葉が、あなたの身内の生命は、絶望的なのだということを意味する宣言もサラリと言つてのける。

医学の進歩は、急な病気の時間のサイクルを、引き延ばすことはできても、結局、もとには戻せないのではないか。医局員が胸を張って説明してくれたCTスキャンの効用も、所詮は、何日、延命で

きるかということにすぎないではないか。突然訪れた「別れの時」に少しの猶予を与えてくれたとしても、それが、命を救ったことになったのだろうか。

朝のお参りを終えて、そのまま、すうっと、身内の者も気づかぬくらい、おだやかに亡くなっていくことの方が、いい往生ではなかったか。素裸にされ、管だらけのからだにされ、機械で、生命をささえられていることに、おぼさんは、満足しているだろうか。

当事者の夫である住職は、ひとつの決断をした。「できるだけ、やれるだけのことをして欲しい」という、家族としての医療者たちへの申し入れである。た

だし、それは、住職が自ら積極的なのだのではない。医療側からの問いかけに答えたただけだ。

大正初期に生まれた住職は、自分自身の定期検診の結果も従姉に聞いてもらうほど、おおよそ病気の説明などという科学的なものに、すすんで耳を傾けることなどはしない。良いか、悪い、か、あとは、全て医者まかせであり、家族まかせである。おぼさんの病状も、自ら、医師に尋ねることなどしようとしなない。従姉と私が、説明を受ける。選択支を、住職に問い直すという中継工作が必要となる。

「それで、意識は戻りそうなのかい？」
住職の質問に従姉は、答える。

「もう戻らないようですよ。お医者さまが、積極的に回復するような治療の方向に進めますか、それとも、もう廻らない意識だから、治療するようなことは止めて、自然にゆけるようにするか、相談なさいって話ですよ」

もう二、三年で金婚式を迎える互いの感情は、私たちが口をはさむすじのものではない。「できるだけの、やれるだけのことをして」という住職の言葉を、私たちは、素直に受けとめることができた。結果的にいうならば、その判断が、五百日間の植物状態を生んだのかもしれない。しかし、私たち看取る側には、今、思えば、充実した「おぼさんといのち」を生きた日々となった。(つづく)

季語やぶにらみ (一)

化 偷 草

「季語やぶにらみ」と標題を決めた時は、割合軽い気持ちだった。俳句を始めてかれ四十年、季語には馴れ親しんでいるつもりだったからである。しかし、考えてみればそれは歳時記という先人の労作を参考にして得

木きの下した隆りゆう — いち

(隨筆家)

た知識にすぎない。にも拘わらず、ひとつ季語を私なりの解釈で見てもやろう、歳時記の記述に誤りがあれば正してやろうじゃないか、そんな大それた思いがどこかにあった。

ある日、テレビをつけると、珍しく永六輔

氏が喋っていた。自らラジオ人間と称する永氏は、近ごろ殆どテレビには出演していない。彼は現代の数少ない語り部の一人だと私が秘かに思っている人だが、軽妙な語り口で、

「私は分かりきったことでも。一応『広辞苑』（岩波書店刊）を引いて確かめます」と言っていた。「例えば『花』。美しい、きれい、可愛い、匂いがいい、と大抵は適当な形容詞をくっつけて、花が分かったつもりになり、醜い花、目立たない花、悪臭を放つ花は嫌うかあるいは全く無視してしまう。一体花って何だろうと広辞苑を引くと、『はな（花・華）高等植物の有性生殖を行う器官』と出ています。つまり花は植物の生殖器官ですね。そう聞くと、花を見る目が変わってきませんか。味気ないといえは味気ないけど、種族保存のた

めに頑張ってるんだなと思えば、崇高な気分になれる……。所詮、花ってそんなものなんですよ」

永氏の発言には虚を突かれた感じだった。

私も必要上辞書は常に座右に置いていたが、そこまで徹底した引き方はしていない。早速広辞苑を開いてみると、「高等植物の有性生殖を行う器官。その各要素は葉の変形と見られる。花被（萼・花冠）は形・色とも多様で合弁花・離弁花があり、全々花被を欠くもの（裸花）もある。雄蕊・雌蕊がそろったものを両性花、いずれか一方を欠くものを単性花という」と出ていた。

この六行足らずの文章で一応花の概念はつかめるが、萼（苞との違い）・花冠・合弁花・離弁花・裸花・雄蕊・雌蕊・両性花・単性化

について確認しなければ完璧を期したとはいえない。勿論私はそうしたが、ここでは長くなるので割愛する。

「季語」とは何だ、「やぶにらみ」とは……。

私は正しく認識した上で、この語を選んだわけではなかった。告白すれば、なんとなく語呂がよかったから使ったまでのことである。これは検討の余地ありだな——独りごちて、私は広辞苑と日本国語大辞典（小学館刊）を見くらべてみた。

季語Ⅱ連歌・俳諧・俳句によりこまれて、その句の季節を示すための、特に規定された語。鶯を春、金魚を夏とする類。季の詞ことば。四季の題目。季題。（広辞苑）

季語Ⅱ連歌・俳諧・俳句で、四季それぞれの季節感をあらわすために、句によりこむ語。

季ことば。季のことば。四季のことば。季の題。季題。明治四十一年十二月号の俳句雑誌「アカネ」の句評において、大須賀乙字おちじが用いたのが最初と言われる。（日本国語大辞典）

季題については、広辞苑は①季語に同じ。

②俳句を作る詠題としての季語、とあっさり記しているが、日本国語大辞典の方は、連歌・俳諧・俳句で四季おりおりの季節感をあらわすために、一句の中に詠みこむ題。またはそれをあらわす言葉。季語。季。明治四十年ころ、河東碧梧桐らの日本派の俳人によって用いられたのが最初といわれる、とやや詳しい。しかし、その記述には曖昧なところがある。季語・季題という熟語が日本派の俳人らの造語だとすると、明治三十五年に他界した総帥の正岡子規はこれらの語を用いることが

なかったことになる。子規の著書すべてに目を通したわけではないから結論は出せないが、かなり疑問は残る。

「やぶにらみ」を日本国語大辞典で引くと、①物を見るとき、両眼の視線が平行しないで、一眼が他方に向く状態の俗称。斜視。ひがらめ。やぶ。②言動・思考などが見当違いなものと、と出ており、広辞苑の記述も大同小異である。私が意図したのは②の拡大解釈した方であるが、斜視からの連想で「斜に構える」(物事に正面から、また正攻法で対処しないで、皮肉・からかい・遊びなどの態度で臨むこと)と混同した嫌い無きにしもあらずであるから、「季語やぶにらみ」は、季語に関する見当違いな遊び感覚の珍解釈、とても思っ頂ければ、私としては気が楽である。

伊豆で暮らすようになって十数年になるが、一年として前の年と同じだと感じたことはない。少しずつ、どこか何かが違っているのである。殊に今年はその違いが顕著であった。伊豆では約半月から一ヵ月、例年より季節は先行した。何しろ冬暖かだったのである。

霜柱を見たのは、暮から正月にかけての数日にすぎなかったし、梅も椿も、すでに正月には多く咲いていた。水仙の花も早かった。いつもなら三月下旬から四月上旬にかけて降る春の長雨、いわゆる菜種梅雨は、菜の花の気もない二月下旬に降ったし、いつもなら辛夷ズミの後から咲く白木蓮や紫木蓮が先に咲いたのも、三月半ばから咲き始めた桜の、開花から満開に至るまでの異常な速さも、今年の春

の氣候の特異さを表していた。四月、新入生の肩に散ってこそ落花は絵になるが、三月中に新浪人生の肩に散ったのでは洒落にもならない。東京の小学校の入学式は四月六日であった。葉桜の下を嬉々と通って行く若い母親と子供を見て、この親子の思い出には、入学式の喜びと桜の花は結びついて記憶されないでしまうのかと思うと、なぜか哀れでならなかった。

我が家の庭に限って言えば、エビネ（化偷草）は約一ヵ月早く開花した。例年四月下旬に花茎を立て始め、ゴールドデン・ウィークのころ満開になるが、今年は三月下旬に花茎を立て始めた。

エビネ（化偷草・海老根・蝦根）Ⅱラン科の多年草。地下茎が太く節が多いところをエビに

見立ててこの名がついた。暗緑色の葉は笹の葉に似て縦筋が目立ち、春先新葉が立ったままで開ききらないころ、葉に囲まれるようにして、高さ二十〜三十センチメートルの花茎が直立し、紫褐色の花を穂状に十個くらい開く。これをヤブエビネというが、自然交配により、花色は緑がかつたもの、黄色いもの、白っぽいものなど、花形も微妙に異なり変化に富む。近ごろは人工交配で花も多様化している。匂いのよい種類もある。自生地は北海道・本州・四国・九州の山野地の木陰。

以上がエビネの説明の概要で、歳時記も野草の解説書も似たのよつたりである。中には「エビネラ、^{えびねらん}というのは誤り」と書かれたものもあるが、

わが庭のいついづこより化偷草 ^{えびねらん} 富安風生

という作例な載せている歳時記もある。風生先生ほどの大家になると、細かいことには頓着されぬらしい。ただ一言言わせて頂くならば、先生は「いついづこより」と庭で見つけたエビネに感動されているが、風媒花じゃあるまいし、地下茎を伸ばして増えていくエビネが突然出現するわけはなく、誰かが植えたに決っているのである。

それにしても、どの歳時記を見てもエビネの作例が少ないのは、ここ十年来続いている山野草ブームの中でエビネも脚光を浴びたが、一般的には馴染みが薄いということであろうか。

エビネが一部好事家の間で異常な人気になったのは何年前だったか。一種の植物がブームになるには許話師的な仕掛け人がいてのこ

とで、趣味でというよりは投機的な思惑で煽り立てるといった面が強い。エビネブームの最中、テレビの取材に応じて栽培家は「これは〇〇円、それは〇〇円」と、鉢植えのエビネを指さして、事もなげに百万円単位の金額を口にしていた。私には信じられなかった。

私にはそれだけの価値を見出だせぬ「たかがエビネ」だったが、その人には金の成る「されどエビネ」だったのであろう。ブームが鎮静化した今、あのエビネはどうなったか、その後のエビネの行方が私には気になる。

この冬休み、伊豆大島の中学院に奉職している青年が訪ねて来て、庭のエビネを見ると、「大島にもたくさんあります。黄色い花が咲くのもありましてね」

と言った。

「でも匂いのするやつはないだろう」

「それがあるんですね」

青年は匂いについて諄々と説明してくれたが、私にはとうとうその匂いは伝わってこなかった。

「採ったら送ってくれないかな」

「どれでもいいのなら、今の季節が一番採りいいんですがね。これだけは花が咲いてみないことには分かりませんからね」

「そりゃあそうだ。じゃあ花の咲くころ採って来てよ」

「駄目ですよ、そのころは虻が出てますから。僕弱いんです蛇には……」

結局ニオイエビネは物にならなかったが、匂いは一度嗅いでみたいものだ。

街にはこぼす山の言葉やえびね売

辺見京子

この句を歳時記で知ったのと、その人を見かけたのと、どちらが先だったか定かではないが、鎌倉駅の近くの銀行の通用門の横に坐って、四、五種類の野草の苗を売っていた。その中にエビネも交っていて、一株五百円の値がついていた。十日ほど経ってそこを通りかかると、その人は同じ姿で坐っていた。五十がらみの、無口な女の人だった。足柄か、あるいは丹沢の麓辺りの山里から出て来た人であろうか。

その人からは、遂に山の言葉は聞かれなかった。

捨て植ゑの化偷草も花を立てにけり 隆一

(この項終わり)

◇ ◇ 長 篇 連 載 ◇ ◇

伝^{でん} 弘^ぐ の 生 涯 (十七)

— 大僧正岩井智海伝 —

松^{まつ} 浦^{うら} 行^{ぎょう} 真^{しん}

管長として

浄土宗管長ならびに総本山知恩院門跡第八
十世に就任した岩井智海大僧正の晋山式は、
昭和九年秋十月十八日の午後一時から、挙行
された。

六年九月には満州事変が勃発し、翌七年一
月に戦火は上海に飛び火して、これまた上海
事変へと発展し、しだいに軍靴の音が高まっ

てゆくという、キナクさい歳月のなかで行わ
れた晋山式であつた。

晋山式には「お練りと称する」道中行列が
つきものだが、知恩院の場合、近來のコース
はおおむね次のようなものであつた。

すなわち、知恩院門外にある浄土宗寺院な
どを控え所とし、そこから新門前まで車で行
き、すでにそこに整列して待機している行列
の衆僧たちと合流して出発、桜馬場を通過し

て三門にいたるのである。

しかし「知恩院史」が伝える岩井の場合はちょっと様子が違って、控え所ははぶき、国鉄七条駅から自動車数十台をつらねて三門前にいったとある。その日、大僧正は『燃ゆるが如き緋の衣に、白地唐草模様宗紋織出しの袈裟を着し』といういでたちであった。そこからはあとはどの方も同様なのだが、まず三門前にて『広開浄土門』の偈による開門式を行ったあと、三門わきの女人坂をのぼって、御影堂（大殿）の前に広がる境内に入り、正面から昇殿して本尊前に到る、というコースである。

この盛儀を拝そうと、彼の熱心な信者はむろんのこと、全国から入洛してきた二万数千人の善男善女で、沿道が埋ったというから、昭和初期においては大変なイベントだったに違いない。

しかし管長に就任したからといって、伝道

を天から授かった使命と信じているこの大僧正は、知恩院の北東に位置する、奥まった門跡の居間にこもってしまいうようなことはなかった。

晋山式の翌日には、もうNHKの京都放送局から全国中継により、「旭之心」と題する法話を放送している。

岩井にとってラジオ放送は、これが初めてではない。つい三ヵ月ほど前の、また増上寺にいた七月十四日に、「国民修養の目的」と題して、当時は芝の愛宕山にあったNHK東京中央放送局から、全国に中継放送したのが最初で、昭和十二年に病いに倒れるまで、全部で六回にわたって放送をしている。

この昭和九年という年は、NHKが番組に「仏教講話を積極的に取り入れはじめた記念透させるのに大いに功のあった友松円諦ともまつ えんたい（住し）が、三月一日から十五回にわたって「法句経講話」

すべき年”であったという。仏教を大衆に滲を放送しているし、友松の同志だった高神寛昇が、十二回にわたってかの有名な「般若心経講義」を始めたのも、この年の四月からであった。

友松と高神の「聖典講義」が当たり前したのにすっかり気をよくしたNHKが、ついで白羽の矢をたてたのが、つとに名説法の聞こえ高かった岩井なのであった。これがまた狙いどおり「柳の下のだジョウ」となったものだから、NHKは単発だけでなく、「聖典講義」の担当も依頼した。十年七月一日から連続十回にわたった長編の「二河白道の譬喩」がそれである。

いまはテレビ時代で、すべてカラーが当然となり、ラジオは車中や家事のかたわら、仕事のかたわら聞かれる「ながら族」のものとなってしまうが、当時では唯一の電波メデ

ィアであり、そういう伝達手段に、いわゆる教養講座ではない「お説教」が登場するなどということば、やはり画期的なことと言わねばならなかった。

もちろん岩井の布教活動は、ラジオだけにとどまるものではない。五重の授戒も、管長に就任した年は別として、翌年からは従来とくらべて、ほとんど変わっていないのだ。

その他にも、「巡教」と呼ばれる、管長としての地方伝道がある。

つまるところ、布教に日のない有様が続くわけだが、その中でもっとも大きなイベントは、昭和十一年六月八日から約五十日にわたった、満州と朝鮮への特別巡教であつたろう。

高橋良和によると、この鮮満巡教は知恩院の庶務部長だった細井照道の企画で、岩井はそれに乗って出かけたのだということであつた。先にも記したが、岩井が細井の組んだス

ケジュールにのらないので、細井が「あんなわがままな管長は初めてじゃ」とぼやいたというのは、この時のことである。

そうはいっても、満州や上海で始まった局地的な戦火が、やがて支那事変という日中の全面戦争に拡大しようという、ミリタリズムの高まりの中の巡教である。いろいろと窮屈なこともあったであらう。

一行は神戸から乗船して門司に寄港し、門司を発してからは大連に直行した。これは同地にある開教寺院・天照寺で五重相伝を行うためであったが、そのあとは各地で戦没者の慰霊祭を執行し、軍の病院に療養する傷病兵を慰問しつつ北上したと記録にある。その道程の前半には、彼が四十数年前の日清戦争で従軍した土地のすぐそばを通過することもあり、感慨にもまたひとしおのものがあつたであらう。

新京（現在の長春）では当時の満州国皇帝に会い、持参した福田平八郎^{（注3）}、案本一洋描く日画「華頂山の四季」を贈ったりしている。当時としては、一宗のバイタリティをしめす画期的な出来事として、迎えられたことはいうまでもない。

帰途は約二十日間にわたって朝鮮巡教を果たしたのだが、最後の仕上げは、釜山・知恩寺での五重巡教特別講座の開催であつた。このときのことは前にもちょっと記しておいたが、この知恩寺は、現浄土宗宗務総長・大田秀三師の出身寺院である。

それにしても、とても七十四歳の大僧正にこなせるスケジュールとは思えないハードなものである。だが実際には、彼はいきいきとしてこなしていた。

そもそもこの海外巡教自体にしてからが、約百日にわたった九州・四国への国内特別巡

教が終わってわずか八日後の出發、というもののなのであった。休むひまもない——とはこのことで、ちょっと信じられない活動ぶりである。

しかし宗内の住職や檀信徒たちは、それを喜び、歡迎していた。先代の山下現有管長は遷化されたのが百四歳だったことでもわかるように、高齢に過ぎて、各方面から「仏教界の生き仏」といわれた方である。そのあとが岩井ときて、「静」から「動」への転移が、時流にふさわしく感じられたのも、その一因をなしていたかもしれない。

この年はある意味で、岩井の布教活動の最も充実した年だったといえなくもない。例によって、記録に残っているもののみでの計算だが、明治四十年いらいの三十年間で、この年が五重相伝を勤めた最多回数、四十回のぼっているからである。それも一年をまた

ず、七ヵ月で。

満鮮の巡教から帰って二ヵ月にも満たない九月中旬、岩井はふたたび秋季特別巡教に出發し、横浜の光明寺に留錫した。五重相伝のためである。

その初日か二日目であつたか、とにかく日付は十六日だったという。^(註4) まもなく入堂して高座へあがるべく、勸誡師の間にあてられた居間でその時のくるのを待っているとき、突如として岩井の upper 体がやや斜めに揺れたかと思ふと、

「む」

と低い声があがり、教珠がポロリと落ちた。知恩院の布教師として岩井の国内巡教にはいつも随行していた宮林大廉があわててにじりより、

「御前、どうなさいました」
と抱きかかえるようにした。

岩井が何か言ったようだった。しかし、あのさわやかでリズムカルだった言葉はもはやもつれて聞きにくく、その右半身の自由は瞬時にして不如意となっていた。

高血圧による脳溢血の発病であった。

ただ、倒れたりのけぞったりしなかったのでも察しられるように、ごくごく軽微であったのは不幸中の幸いだったが、しかし勸誠師の勤めを続行するには、もはや無理な身体となっていた。^(注。)

岩井は二十日になって京都へ帰ったが、すぐ京都大学(当時は京都帝国大学)の付属病院真下内科に入院し、絶対安静の療養にはいる。

しかし軽度であったために、快方に向かうのも早かった。十一月二十四日に知恩院で行われる伝宗伝戒加行道場の正授戒正伝法にも病室から出席したし、付法伝授道場にも出ているのだ。そして十二月八日には約八十日間

の療養を終えて退院し、堺の自坊・旭蓮社大阿弥陀経寺でしばらく静養し、翌春にせまる三上人遠忌法要(二祖鎮西上人七百回忌、三祖記主禪師六百五十回忌、知恩院第二世勢観房源智上人七百回忌)にそなえることとなった。

もっともそれまでの間に、彼は信州の鹿教湯温泉に、湯治に出かけている。

これは長野県更埴市にある長福寺の住職で、岩井が横浜の光明寺で発病した時かたわらにいた宮林大廉が、旭蓮社に岩井を見舞ったときの会話から、実現したものだった。

そのとき岩井は、

「なんとしても治して、もう一べん元気になりたいものだよ」

と、しみじみと言った。

「では鹿教湯で湯治なさってはいかがですか。あそこは中風や動脈硬化症に効くというので有名ですから」

宮林のいうとおり、鹿教湯には現在、高血圧の研究所をかねた療養所があるほどで、循環系の病には効果のあることで知られていた。信州の上田から、バスで約一時間ほど西南へ行ったところにある。

話はそれでたばたと決まり、岩井は宮林の案内で出かけた。

どれほどの期間を、湯治にかけたかは不明だが、それなりの効果は得たのであろう、帰途、

「せっかくここまで来たんだから、長野の善光寺にお参りしたい。大宮尼公にもお目にかかりたいし」

と言いだした。大宮尼公は智栄尼といい、現善光寺大本願の法主・一条智光台下の先代に当たる方である。

その訪問のために、ある意味ではスタイリストでもあったこの大僧正は、心と形の準備

というか、一種の威儀を調えるために、宮林の自坊に立ち寄ることになった。長福寺は信越本線の屋代駅前にあり、長野とはJRで十五、六分のところである。

以下は、大廉の孫にあたる宮林昭彦師の語ってくれたものである。もちろん彼自身の体験ではない。祖父から聞いた話の記憶をたどってくれたのだ。ご存じの読者も多いと思うが、宮林昭彦は横浜大光院住職にして現大正大学教授であり、この雑誌『浄土』の編集同人の一人でもある。父を戦争で失った彼にとって、祖父大廉は「育ての親」であり、師匠でもあるのだった。

『善光寺大本願に着くと、白道会の方々が連絡をうけて待っていたそうです。白道会というのは、岩井さんを勧誡師として善光寺で五重を受けた人たちが、その

感動を記念して結成した会ですね。そういう方々が、ふたたび岩井さんに会って、随喜の涙を流したと聞いています。

というのが、そのときのことを、後年、善光寺檀徒総代の藤井伊右衛門さんにお目にかかって、感想を聞いたことがあるんです。藤井さんはかつて、奥さんの静子さんといっしょに岩井さんの五重を受けたことのある人でね。藤井家は善光寺門前の造り酒屋さんで旧家ですが、藤井さんご自身も県の公安委員長をされたし、奥さんも県の仏教婦人会会長だったという、篤信のご夫妻ですよ。そういう人が岩井さんのことを、本当に仏さまのようであったというんですね。奥さんの静子さんのほうは、今も九十幾つでご存命です。

藤井さんはいろんな方の勧誡で五重を

受けておられて、その中には布教師として名のとどろいた高僧もおられるのだが、「五重は何度受けてもいいもんだ。しかし岩井さんの勧誡だけは突出していた」というんですよ。「岩井さんより面白おかしく話される方はたくさんおられた。しかし心に残らん。岩井さんの話は本当に有難かった。八十歳になっても、念仏の有難さがいまだにあざやかに心底に残っている」といってね。

その藤井さんがいうわけですよ。「療養の帰途、長野に寄られて、善光寺で十念をいただいたんだが、有難さには変わりはないけれども、あの元気なお方がステッキをついておられて、それが非常に痛々しいように思われた。言葉も少しもつれておったしね」と。

第一回の発作のときは短い期間に、ほ

とんど普通と変わらないくらいに回復されたと師匠から聞いていましたから、してみるとこの時はまだ完全に治っていないかったらしいんですね』(宮林昭彦談話)

——もう一べん、前のようにになりたい。

という意志の固さのせいもあったと思うが、昭和十二年三月ごろにはほとんど痕跡をとどめないまでに回復し、六日から一週間にわたって繰り広げられた三上人遠忌法要には、見事に大導師の勤めを果たした。一書は当時を回想し、

『……老管長は緋衣七条の袈裟、水冠に威儀を正し、衆僧を引具して昇殿、三陛下御下賜品に輝く御影堂正面に進まれ、梵唄の音もいと厳かに日中法要は営まれ、庭前の奉納舞楽と相まって、渦巻く五万

の善男善女に法雨はそそがれ、京洛の浅き春に念仏の法花けんらんとくりひろげられた』

と記録している。

そればかりか、第二日目の七日には午前十時から四十分間にわたり、NHK京都放送局の中継で、岩井の口演する『三上人遠忌を迎えて』が法要ともども放送された。またこえて九日には、河原町の京都朝日会館で、椎尾(注6)や窪川旭丈のほか、作家の中里介山(注7)らとともに、得意の弁舌を振るったというのだから、周囲はその見事な回復ぶりに、ほっとしたことであったろう。(つづく)

(注1) 友松円諦(一八九五—一九七三) 名古屋

市生まれ。明治三十七年(一九〇四)伯

父で東京深川の浄土宗安民寺住職友松諦常の養子となり、現大正大学の前身。

宗教大学卒業と同時に慶応義塾大学へ。
大正十三年（一九二四）卒業して同大学
予科講師、昭和二年（一九二七）には大
正大学にも奉職、同年九月から欧州に
留学、六年帰国して仏教法制経済研究
所などを設立、九年三月NHKラジオ
の『聖典講義・法句経』連続放送で大
反響を得て、仏教復興の機運をつくる
端緒を開いた。その年、高神覚昇と真
理運動を始めて仏教による新生活運動
を展開したが、発足まもなく「浄土」
の实在を否定して問題化、浄土宗と対
立したほか、運動の賛助者・梅原真隆
らが去るという事件が起きた。浄土宗
との関係は一応おさまったが、その後、
戦争の進展とともに真理運動の中絶を
余儀なくされ、十九年「聖徳太子十七
条憲法讃仰会」に改組。戦時中、深川
翼賛壮年団長を勤めたことがたつた
戦後はバージとなり教職を辞した。二

十二年（一九四七）仏教寺院が一寺もな
い東京神田に神田寺を創建、浄土宗を
離脱して宗派に属さない寺院とし、す
でに住職となっていた安民寺なども合
併、仏教聖典の編纂、真理運動の世建、
寺院革新講座などを開いて戦後のカリ
スト教攻勢に対応、全日本仏教会初代
事務総長となった。ある意味ではトラ
ブルメーカーだったが、しかし仏教の
大衆化に及ぼした功績は無類で、放送
協会賞、仏教伝道文化賞など受賞。著
者も『法然』『法句経講義』『宗教読
本』など百数十冊にのぼる。なお平成
二年、神田寺も安民寺も、ともに浄土
宗に復帰した。

（注2）

高神覚昇（一八九四～一九四八）愛知県
生まれ。二歳のとき三重県の実言宗智
山派林光寺住職・高神覚明の養子とな
り、明治四十二年（一九〇九）得度、大
正五年（一九一六）智山勸学院卒後、大

谷大学、東大寺勸学院などで研究生活を送り、九奉智山勸学院に奉職のち、教授。同勸学院が大正大学に合併され同大学教授に。昭和九年（一九三四）NHKラジオから放送した『般若心経講義』が大きな反響をよび、同年友松円諦と真理運動を起こし、仏教の大衆化に尽くした。『高神覚昇選集』全十巻など著書多数。

（注3）

福田平八郎（一八九二～一九七四）大分県生まれ。昭和期の日本画家。京都絵画専門学校（現京都市立芸術大学）卒。大正八年（一九一九）第一回帝展に「雪」が入選、いらい官展ひとすじに作品を発表したが、第三回帝展に出品した「鯉」が特選となり、その写真でいちやく有名に。作風は光琳派の装飾性を超えて独自のフォルムを創りだしている。昭和三十六年（一九六二）文化勲章受章。代表作は「漣」

「新雪」「雨」など。

（注4）

岩井智海管長は横浜光明寺の五重相伝のため昭和十二年九月十二日に京都を出発している。当時は特急「つばめ号」で東京～大阪間八時間を要したから、横浜着は十二日としても、翌十三日は休養にあて、十四日は予行などの打合せにすぎし、十五日初日、十六日が第二日目となった公算が一ばん大きい。

もし十二日の夜行で出発したのなら、十三日の休養はなおさらであったろう。

（注5）

岩井智海管長の第一回高血圧発作当時の横浜光明寺の住職は、のちに増上寺執事長から鎌倉光明寺の住職となった宮下舜達上人であった。岩井僧正の発病で光明寺はバニック状態となったが、とりあえず柴田玄鳳師を招請し、ついで高山龍善師を勸誡師に招いて危機をしのいだ。高山師は岩井管長の満州・朝鮮巡教にも、御代説として随行

した人で、管長の気心もよく承知した方だった。

(注6) 椎尾弁匠大僧正(一八七六—一九七二)

は愛知県春日井庄内村(現名古屋市区新福寺町)の高田派円福寺住職椎尾順位師の五男。明治三年(一八八八)名古屋市の浄土宗瑞宝寺住職原弁職について得度。東京の浄土宗高等学院、京華中学、旧制第一高等学校をへて明治三十五年(一九〇二)東京帝国大学に学び、哲学科宗教学を卒業。そのさい恩賜の銀時計を。大正四年(一九一五)文学博士。その間、明治三十三年には小石川表町に興学舎を設置し(のち生西寺に移転)官立の大学に学ぶ宗門子弟を育成、数多くの俊秀を輩出させた。教職歴では東大卒業と同時に宗教大学教授、明治四十年早稲田大学講師、大正二年東海中学校長、同十三年日本大学教授、十五年大正大学教授、昭和三年(一九

二八)同文学部長、十一年、十七年、二十七年の三期にわたり同学長、特に三期目は戦後の難関を乗り切って評価が高い。また住職歴では、大正二年東京二本榎の清林寺、名古屋の建中寺のほか、昭和十九年(一九四四)には京都の大本山清浄華院、二十年には東京芝の大本山増上寺八十二世に進んだ。(他に兼務寺院が六カ寺あり)。さらに学問的には「哲学の社会文化的研究、宗教の社会動学的研究」を標榜、日本史をはじめ外国語による仏教研究、梵語、パーリ語による原典研究と広範囲。また教化活動としては、宗教は単なる個人解脱ではなく、社会的に解脱して真の共生を全うすべきだと主張して「共生運動」を提唱した。この運動は当時の各種宗教倫理運動に思想的根拠を与えたばかりでなく、緊張的生活運動と体操を取入れた共生結集方式は近代仏教運

動に大きな影響を与えた。さらに昭和三年の第一回普通選挙に愛知県第一区から出馬して衆議院議員に当選している、昭和十七年の辞職まで三選を果たし、国会議員活動を通じて産業・社会同朋生活を主張、一方、議会生活から得た政治経済国情への新しい認識で仏教指導につとめた。昭和六年勸学、七年司教、二十年大僧正と最高位に。また二十五年には渡米して独自の仏教論を開陳した。浄土宗の黄金時代を築いた人物で、六十歳代で眼をわずらい、八十歳代で失明しても活動を続け、*「昭和の鑑真」*と評された。著作は多いが代表作は『*椎尾弁匡選集*』十巻に。なお、岩井智海伝終了後は取材期間においてこの椎尾弁匡伝の連載を予定しているの、ご愛読願えれば幸いである。

(注7) 窪川旭丈師(一八七四—一九四三)は山

梨県生まれ。瑞泉寺の単丈和尚に得度、浄土宗高学院卒。布教をこころざして日夜修練に励み、明治四十四年(一九一七)の宗祖七百年遠忌当時は布教部長として、また一級巡教師として東奔西走、大正四年に宗務を退いた。住職歴は東京浅草竜宝寺、湯島涼智院、川越市の蓮馨寺などだが、昭和十二年にはハワイ開教区監督となりホノルルに赴任、同教区昇格にともないアメリカ開教区監督となり、開教事業に献身的努力を重ねたが、日米開戦で抑留収容所入りし辛酸をなめ再び故国の土を踏むことなく遷化した。

(注8) 中里介山(一八八五—一九四四)は東京生まれ。本名を弥之助。電話局に勤めるかたわら苦学し小学教員に。ついで現東京新聞の前身・都新聞に入社。その間、キリスト教の感化から社会主義思想にすすみ、平民新聞に小説を投稿

したりしたが、しだいに仏教思想に移る。明治四十二年（一九〇九）都新聞に小説を連載したのをきっかけに「高野の義人」「室の遊女」「文覚」を連載、大正に入って第六作目「大菩薩峠」が

好評を得て文名あがり、十年まで連載、その後も死にいたるまで書き続けたが未完に終わった。他に「法然」「夢殿」「百姓弥之助の話」なども。「中里介山全集」二十巻がある。

寺内大吉 著

『立ち止まるな善導』

歴史像でとらえた念仏者・善導!!

A5変型 四七四ページ 定価一八〇〇円

《発行・発売》

毎日新聞社

〒一〇〇一五一 東京都千代田区一ツ橋一―一

TEL (〇三三) 二二二一〇三三

◎読者の皆様へのお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもありますが、誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、くれぐれも宜しくご協力下さい。

- 一、内容 自由（生活の一コマや我感あるいは思うことなどをエッセイ風におま）とめ下さい。
- 一、枚数 四百字詰用紙六〜十枚程度
- 一、締切 毎月末日

法然上人讃仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 五十六巻 五月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

平成二年 四月二十五日 印刷

平成二年 五月 一日 発行

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷所 長谷川印刷

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人讃仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒一〇三 振替東京八一八二一八七番

仏事と信仰生活・浄土宗

宮林雄彦編

● B 6 版並製

●百四十二頁

●定価八百円（送料一〇〇円）



本書は浄土宗檀信徒の信仰生活のための手引書である。内容は仏壇のまつり方や礼拝のしかたをはじめ、浄土宗の教え、浄土宗の年中行事などを多数のイラストや写真を用いて解説する。

【目次】第一章 仏教と浄土宗の教え／
①仏教の教え／②仏教の流れ／③浄土宗
の教え／④念仏信仰の真髄／⑤寺参り墓
参り／第二章 日々の信仰生活／①お仏
壇／②お仏壇への礼拝のしかた／③その
他、仏壇・仏具、お墓参りの注意／第三
章 お経・念仏の実践／①日常のおつと
め／②その他のお経／第四章 仏教行事
の知識／①年中行事／②葬式と年忌供養
／③その他の仏教行事



発行発売 群 書

〒170 東京都豊島区巢鴨 4-7-6-403

発売続群書類完成会

〒170 東京都豊島区北大塚1-14-6

☎東京(03)917-8411
振替口座 東京7-168759

☎東京(03)915-5627
書店でも注文できます。